

図書館通信 —70—

1984. 12

忘れがちな、大切なこと

山崎 準 二

三年前赴任してきて以来、静大図書館の職員の皆様をはじめとする多くの方々の手を煩わすことになってしまった二つの仕事を、今春やっと公のものとすることができました。一つは、二十世紀前半ドイツの教育学者ペーターゼン (Petersen, P., 1884~1952) の著作「イエナ・プラン」の訳業であり、他の一つは、大正期から昭和初期にかけての郷土教育運動の中心的人物小田内通敏 (1875~1954) の経歴と著作・関係文献目録作成及び郷土教育論の考察作業であります。いずれも、乏しい知力を振り絞った作業というより、年々たまるコレステロールをフルに活かした作業といえるものであります。

前者は、1927年に刊行された初版「自由で一般的な民衆学校のためのイエナ・プラン」から、ペーターゼン没年の1952年に刊行された第22版〔改題されて〕小イエナ・プラン〕に至るまでの各版を比較・検討し、それらの内容的変化を整理して全訳及び訳注作成を行うという作業でした。最初私の手元にあったのは、ドイツの古書目録から購入することのできた初版と第22版のみでありましたが、その両者の間にかかなりの内容的変化が存在していたのでした。その為、まず各版をもれなく収集・閲覧し、それらの内容的変化を整理するとともに、原註に挙げられている引用文献にも可能な限り直接あたってクリティークを行う必要がありました。この作業は、私個人が東京のめぼしい諸機関に足を運ぶだけではむろん足らず、国内外を問わず文献 (ないしはそのコピー) 入手のための多大なご苦勞を参考調査係の方々におかけすることになってしまいました。その結果、内容上の変化が特に著しかったのは、第2版 (1929) から第4版 (1932) の間と、第4版から第8版 (1936) を経て第14版 (1946) に至る間であること、第2~4版の変化は、ペーターゼンが教育科学講座の教授をしていたイエナ大学付属実験学校における実践的研究成果に基づいたものであること、第4

~8~14版の変化は、内容からしてナチス政権の誕生・崩壊と強く関係していること、あるいはまた一部引用の仕方が不適切であるため理解困難や誤読が予想される叙述部分が見られること、等々を把握することができました。

後者、すなわち小田内通敏の経歴と著作・関係文献目録作成作業は、小田内本人が書きしるした半生の記から散見されうる諸事実をいとぐちに、ご遺族及び関係者の方々へのインタビュー調査と小田内が関係した諸大学・諸機関への文献探索調査からまず始めました。「小田内」という名字と小田内の池袋路上での交通事故死を報ずる小さな新聞記事をたよりに東京の電話帳を捲り、幸運にもご遺族にめぐり会え、さらに早大講師時代の教え子の方々をもご紹介していただきました。文献も、学部・図書館が発行する身分証明書、国立大学図書館間共通閲覧証、紹介状、それに国立国会図書館の館外貸出依頼状等々を携えて、いろいろなところへ漁り歩きました。それでも当然足りず、静大図書館を通して各機関へ照会状を送り、情報や文献コピーを入手しました。こうしたインタビュー調査や文献探索調査によって、それまで不明であった諸々の事実を知ることができたのでした。

さて、このような舞台裏の話を長々と書いてきましたのは、ただ苦勞話をしたいがためではありません。上述してきたような作業過程で、日常ともすると忘れがちな、それでいてとても大切なことを改めて強く感じ、それをここに書きたかった

も く じ

専門雑誌を借りてみよう……………	2
〈参考図書を紹介と使い方〉	
OED ……………	3
ケミカルアブストラクツ……………	4
『静岡県自由民権史料集』……………	6
教職員著作寄贈図書……………	6
お知らせ……………	5

からです。

その「忘れがちな、大切なこと」とは、いわゆる「研究業績」なるものは極めて社会的な生産物である、ということです。関係する先行研究の蓄積の上に自己の作業の出発点を設定できたり、関係文献・資料の入手やインタビュー調査、そして文献探索調査などでは数多くの方々のご配慮やご援助を得ることができました。残念ながら未だお会いすることのできていない、関係する先行研究を執筆された先輩研究者の方々、数時間に及ぶインタビューにおつき合い下さったり、その後も様々な情報をもたらして下さいました。文献探索調査にあたって様々なご配慮・ご援助を下さった関係諸機関の職員の方々、国内外を問わず文献・資料の入手のためにご努力下さったり、諸々の手続きでお手数をおかけした静大図書館の方々、さらにいうならば研究作業遂行に要した費用の提供者（すなわち国民——もっとも政府の文教施策のために、旅費を中心として薄給からかなりの出費を強いられたのは事実であります）等々、これらの人々と私の共同労働の生産物として今回の訳本なり論文は存在していると思うのです（もちろん最終的な一切の責任は執筆者である私自身が負うべきなのは当然ですが）。これは、たんなる外交辞令のないやらしい「謙虚さ」といったものの表明ではありません。「研究業績」などというものは、それを執筆した個人の私的所有物としてはならず、従ってまたそれを生みだすにあたっては、その社会的・研究的意義を客観化して捉え、予想される共同労働の生産物に値するだけのものとしなければならない、と私は率直に言いたいと思うからです。そしてそれは、研究者の端くれとしての私自身が常に自覚しておかねばならないことであると思うからなのです。多少大上段に構えて述べすぎた嫌いはありますが、今回のささやかな二つの仕事を通して、私は以上のことを再確認した次第です。（ある日図書館でコピーをしていたところ、編集委員の山本さんから寄稿を依頼されました。上述してきたような経緯から、「これはもうお断わりできないな」と即座に判断した私の心中をお察しいただき、僭越にも本通信のスペースをうめてしまったことをお許し願いたいと思います。）

1984.11.15. A. M. 1:54

(教育学部・教育社会学)

専門雑誌を借りてみよう

福原 淳 司

それまで私は市立図書館くらいしか知らず、入学当時は大学図書館の書架を見て小説や実用書の類がないことを知っておおいに焦り、また広い閲覧室で上級生たちが黙々と勉強している様を見て威圧感を覚えたものだ。どうも図書館という堅苦しいイメージが浮かび、レポートを書くとか試験直前のあがきなど必要にせまられないと足が向かないという人は私以外にもきついていると思う。何の因果か事務補佐員として別の角度から図書館を見ることができた立場となったのにこの原稿を依頼されても、もっと利用せねばと自分が反省するばかり。

ここ浜松分館はさすがに工学部だけあって書架のほとんどが理工関係の本で埋まっている。その片隅に雑誌コーナーがあり、工学部の場合その性質上、工業雑誌などを多くそろえているのだが残念なことに余り利用されていないようだ。先日私は、電気工学を修めて外国で技術指導をしている人と話をする機会があった。さすがに視野が広く外から見ての日本人の考え方とか、日本の土壌や歴史など興味深い話を伺えた。後進諸国の「日本

に追いつき追いこせ」の結果、今の日本の工業界は危機を迎えている。これを乗り越えていくには何が必要かということが印象強かった。どうも最近の学生は授業で学んでくる以外の専門分野の情報に乏しいと指摘もされてしまった。至言。はたして今どういう分野が伸びているとか、新素材がどのように利用されるとか、化学工業の将来がどうなるかなど、我がクラスの日常会話で議論されたことがあつただろうか。我々はもっと社会の動向に目を向け、もっと工業雑誌などを読むべきかもしれない。『今や5～10人程度の規模の企業でもたいていの専門雑誌、新聞、さらには単行本を読んでいる。……このような現状で他社より半歩でも一歩でも先を進むにはどうしたらよいのであろうか。』(Think tank, No. 8, P58) この続きに興味深い話があるので読んでいない人は一度雑誌コーナーで読んでみてはいかがであろう。なお、雑誌の貸し出しは夕方4時から翌朝11時である。専門雑誌を借りてみよう。

(工学部・工業化学科3年)

〈参考図書の紹介と使い方・①〉

今回よりシリーズで、静岡大学附属図書館所蔵の参考図書（辞書・事典・ハンドブック・書誌・目録・索引・抄録等）の中からいくつかを取り上げ、その紹介及び使い方について、主として学生の皆さんを対象に解説することにいたしました。執筆はその分野の専門の教職員にお願いすることにいたしました。

今回は、第一回として、*OED* (*Oxford English Dictionary*) 及びケミカルアブストラクツ (*Chemical Abstracts*) を取り上げてみました。

OED を引いてことばの履歴を知ろう

棚橋克弥

OED (*Oxford English Dictionary*) の生命は、その表題にいう「歴史的原理」(Historical Principles) に基づいて編さんされていることにある。英語の一つ一つのことばの語形や語義の起源発達が時代順にあますところなく提示されている。しかもその変遷をうらづける使用例が必ず引用されている。たとえば出版物の編集者を英語で editor というが、この語はいつ英国で使いはじめたかという、1712年である。同じページに動詞 edit があって、同意義の初出例文は1793年の引用文である。ふつう、act に -or という接辞がついて派生新語がうまれることを知っている人は、edit よりも editor が先に存在したことを不審に思うにちがいない。その疑問に答えるかのように、*OED* は逆成 (back-formation) という術語を使って、-or が脱落して edit が造語されたと説明する。全12巻のどのページをひらいてもこのような新しい知見が得られるとすれば、*OED* に親しむ人がいつのまにかことばの物知りになることうけあいであろう。

利用者にとって頼りになる辞典は、言うまでもなく編さん者の筆舌につくしがたい労苦のたまものである。それは辞典につけられた「完成に至るまで」(Historical Introduction) という長文の経過説明にのべられているが、もっと生々しい形でその事情をつたえているのは、主任編集者ジェームズ・マレーの孫娘が著したマレー伝 **Caught in the Web of Words* (1977. 邦訳名 *『ことばへの情熱』) である。この辞書づくりが提案されたのは1850年代のおわり近くで、さっそく資料の収集がはじまったが、集められた資料が未整理のまま放置されていたときに、いやむしろ、その実現が絶望視されていたときに、マレーは編集者に迎えらる。1879年のことであった。それから37年にわたって「鎖で權かにつながれたガレー船の奴隷」のような日々がくりかえされる。1884年に第1分

冊が出版されるが、彼が死亡した1915年にはいまだ全巻がそろわず、他の3人の編集者によってその後も辞典づくりはつづき、1928年にようやく完結する。こうして収録語数414,825(うち主要語240,165)、引用例文1,827,360、総ページ数15,480(うちマレーはほぼ半分を編集した)という世界最大で最良の辞典ができあがった。一方、呼びかけに応じて協力をおしななかつた篤志文献読者 (voluntary readers) のことも忘れてはならない。その数1,300人におよぶ。彼らが紙片にかきとめてマレーのもとへ送付した引用例文は、じっさいに使用された数の2倍、350万に達したという。(漱石に英語を教えたディクソンもそのひとりで、漱石の見つけた文例もディクソンをへて *OED* にのった可能性がある。)

ところで、*OED* を利用するに際し、編集方針にかかわって頭にいれておくべき事項が2、3ある。まず、各語の起源をさかのぼるといっても自ずと限度があることから、上限は大体1150年におかれていること(古〔期〕英語から中〔期〕英語に移行する時期にあたる)、さらにまた、各語の各意義を分類し変遷を記述するにあたって、引用例文には最古の用例、および少なくとも百年に1つの割合で用例があげられ、廃語の場合はその最終例があげられていること、そして、一部 (London, York, Jack, Jesus など) をのぞいて固有名詞は扱われず、また、いわゆる four-letter words (卑語) は採られず、普通語 (common words) をのみ対象としていること、などである。

ありふれた語 dog を例として *OED* を引いてみよう。発音につづいて Forms: 1 docga, 3-7 dogge, (3, 6 doggue, 6 Sc. doig), 6-8 dogg, 3- dog と語形(綴字)の歴史が示される。各綴字の前についている数字は、1が1100年以前、2, 3…はそれぞれ12, 13…世紀をあらわす。これで見ると、dog という綴字は13世紀にすでに使用さ

れているが、18世紀までは *dogg* が共存し、19世紀に入っはじめて *dog* という語形に定まったことがわかる。語形につづいて語源が説明される。origin unknown、つまり不明であると書かれている。それから語義の分類へすすむ。それは I. The simple word II. Phrases and Proverbs III. Combinations and attributive uses に大別されている。I の部分の、*dog* が単独で用いられた場合の語義に注目してみよう。

それはさらに 1 から 12 に分類されている。1 は動物の犬についてであるが、それはさらに a から e に細分される。a の項、犬一般についての最古の引用例文は c 1050 (c は頃の意) の用例がとられている。ついで例文の年号だけ列記すると、a 1225 (a は ante、以前という意)、c 1290、a 1300、1393、1460、1568、1586、1601、1686、1732、1869 の用例がならぶ。さらに先を見ると、3. Applied to a person; in reproach, abuse, or contempt: A worthless, despicable, surly, or cowardly fellow と、くだらない人間をさして使うことが指摘される。(日本語の犬ぞむらいが連想される)。その初出は 14 世紀のはじめである。名詞 *dog* の説明が 2 ページつづいて、こんどは動詞 *dog* の項に入り、それが 3 分の 1 ページを占める。このような

書き方で各語とも詳細をきわめた厳密な説明がなされているのである。試みに 18 ページが費されている動詞 *set* の項を引いてください。

OED は全巻出版後、1933 年には補遺 (Supplement) 1 巻が、さらに 1972 年からは新補遺 4 巻が出版され(第 4 巻は未刊)、とくに後者においては、*fuck* や *cunt* などの卑語や差別語が採用されて、ますます包括的な辞典となった。(最近のニュースでは *OED* のコンピューター化の話もすすんでいるという。)このようなすぐれた辞典を書棚にさらしておく手はない。折にふれて *OED* をひらき、言語文化史的な散策を楽しむなどはいかがであらうか。

(教育学部・英文学)
(*印は本館所蔵を示す)

OED への案内書としては、下記の図書があります。

『*OED* を読む「オックスフォード英語大辞典」案内』
永嶋大典著 大修館書店 1983

また、棚橋先生は、英語の歴史を概説したものとしては、下記の図書を推薦されています。

『英語発達小史』 H・ブラッドリ著 寺澤芳雄訳 (岩波文庫) 1982

上記のいずれも本学図書館で所蔵しております。

ケミカルアブストラクツの使い方 —化学文献を捜すには—

菅野 秀明

ケミカルアブストラクツ (Chemical Abstracts, 略称 CA)、俗にケミアブと呼ばれる雑誌の膨大な列が、図書館三階に並んでいるのをご存じの方も多いことと思う。例年春になると、新四年生が何冊もの CA を机に積み上げ、終日頁を繰る姿が見られる。しかし、それを横目で見ながら、その使い方に困惑し、書架の前を歩きつ戻りつしている姿も時折見かける。そのような学生の方々のために、CA の紹介と使い方について、ごく簡単に述べてみたいと思う。

化学現象や化学物質に関する出版物は年々数を増し、そのすべてに絶えず目を通し、必要な文献を選び出しておくことは、大変困難な状況になった。まして、特定のテーマについて、過去にさかのぼって文献を捜し出すためには、文献の内容を簡潔にまとめて索引を付けた、文献調査用の図書に頼らざるをえない。CA はそのような目的のために、1907 年に創刊 (米国、CAS) され、毎週発

行される文献検索用の抄録 (あらすじ) 誌である。

CA には、世界中で発表された化学に関するおびただしい数の雑誌、図書、会議録、特許等が、その抄録と索引でまとめられ、可能な限り速かに掲載される。1 年に 2 巻、各巻 26 号からなり、各巻毎に各種索引が十数冊発刊される。収録雑誌は 14,000 誌、化学はもとより工学、農学、薬学等多岐に渡る。年間 7 万頁に、45 万件もの文献が収められる。このように CA は、その情報量、索引の充実、速報性において、世界最大の抄録集と言われる。

この膨大な頁の中から目的の文献を捜し出すには、まず CA の構成を知る必要がある。各号の CA は、文献の抄録部分とその号の内容だけの索引部分からなる。各抄録の冒頭には、例えば 98:836s のような番号が示されている。98 は巻数、836s はその巻における文献番号である。後に述べる各種索引では、この番号で文献が指定される。文献番

号の後に標題、著者名、所属、掲載雑誌名、発行年、巻号、頁、使用言語が示され、続いて抄録がすべて英訳されて記載される。各号の末尾には Keyword (K)、Author (A)、Patent (P)の索引があり、さらに各巻毎に別冊として、A、Pの他に General Subject (GS, 一般事項)、Chemical Substance (CS, 化学物質)、Formula (F, 分子式)の五種の索引がある。

CAの利用法は、これらの索引を活用し、手際良く目的の文献を見つけ出すことに他ならない。しかし、文献検索で最も大切な点は、索引を手にする前にある。言うまでもなく、何を調べようとするのか、対象を具体的に検討することである。そして、目的とする文献に使用されると思われるいくつかの用語、物質名、化学式、時には著者名などを予測しておかなければならない。

さて、いよいよ検索を始めてみよう。用いる索引は、先に予測した事からによって選択する。概念語や特定できない物質名を用いて検索する場合、GS索引を利用する。現在継続中の巻では、K索引を用いる。GS索引では、やや一般性のある用語が主見出し語として採用される。一つの主見出し語は、いくつかの副見出し語と、個々の文献内容を簡潔に表現した語句列で細分され、それに相当する文献番号が示される。したがって、あらかじめ何個かの用語を用意しておけば、それらのいくつかを共に含む語句列を捜すことによって、より早く目的の文献に到達できる。この場合、用意した用語のうちで、非常に一般性のあるものを検索すべき主見出し語に選ぶのは、得策ではない。また、選んだ用語が主見出し語として採用されていないこともあるので、注意を要する。このようにして索引から、目的に近いと思われる文献の番号がいくつか見つければ、その番号から抄録を捜す。CAの背表紙には、その冊子に収録されている文献番号の範囲が記されているので、この作業は楽である。抄録文には必ず目を通し、必要であれば、原報入手のための記事を書き出しておく。K索引もほぼ同じようにして利用する。

CS索引の主見出し語には、それぞれの化合物群を代表する物質名が用いられ、関連する物質名は副見出し語として並ぶ。それらはさらにGS索引と同じように、文献内容を表わす語句で細分される。この索引を利用する場合、CAでの化合物命名法を確かめておく必要がある。それには、別冊の Index Guide を利用する。この冊子には、GS索引で用いられる見出し語の種類と、その意味についての解説もあり、便利である。

F索引は、化学物質の分子式からの検索に用い

る。見出し語での元素の優先順位は、炭素、水素、他は元素記号のアルファベット順となっている。一つの分子式に対して、相当するいくつかの化合物名が並ぶ。化合物名がわからない時にも使える。

CAによる検索には、時に腕力も必要だ。製本された厚い本を数冊抱えると、かなり重い。数年間に渡って検索するには、何冊も調べなければならぬ。夏の暑い盛りに何度も書架と机の間を往復していると、小さなワゴンが欲しくなる。眠け覚ましにいい運動だ、と言う方もあるが。

現代の情報処理は、コンピューターなしには語れない。ご多分に漏れずCAも、最近の巻についてはコンピューターを使った検索ができるようになった。本学図書館にも端末が設置されており、東大大型計算機のデータベースを利用できる。端末から Keyword を打ち込むと、それに関する文献を捜し出してくれる。しかしこの方法も、現時点ではまだ長所ばかりとは言い難い。重い本を抱え、ノートに文献番号を書き並べる姿が見られなくなるには、もう少し時間が必要のようである。

CAについての参考書は、笹本著*『Chemical Abstractsの使い方』(地人書館, 1975)、吉田他訳*『実用ケミカルアブストラクツの使い方』(講談社, 1983)などがある。泉他監修*『化学文献の調べ方』(化学同人, 1983)も、小冊子ながら例を交えて解説されており、お勧めしたい。

終わりに、この小文が、多少なりともCAを利用されるきっかけとなれば、幸いである。

(理学部・化学)

(*印は本館所蔵を示す)

お知らせ(本館)

- ◎冬季休業中の長期貸出
貸出冊数：5冊以内
貸出開始：12月1日(土)から
返却期限：昭和60年1月12日(土)まで
- ◎休館(臨時も含む)
昭和59年12月24日(月)～昭和60年1月4日(金)
昭和60年1月26日(土)(共通一次試験のため)
- ◎開館時間の変更
昭和60年1月5日(土)～1月10日(木)
月～金：午前8時30分～午後5時
土：午前8時30分～12時

『静岡県自由民権史料集』の 編集に携わって

春山俊夫

去る11月24・25日に自由民権百年第2次全国集会在東京で開催され盛会であった。この全国集会上に合せて静岡県でも『静岡県自由民権史料集』(三一書房刊)が刊行された。B5版850ページ(原稿用紙にして400字詰3,500枚)ほどの大冊である。

編集は原口清(元本学法経短大教授、現名城大学教授)、和田守(本学人文学部教授)らとともに静岡県民権百年実行委員会を組織しておこなった。私は編集担当の大役を仰せつかった。図書館職員ということと日頃地域史料に接する機会も多いからであろうが、関係史料の探索、整理、編集の作業は、専門的な歴史学教育を受けていないためとまどうことばかりだった。ともかく編集・刊行を終えて、図書館職員として、また地域史研究のうえで貴重な勉強になったことを感謝している。

編集作業を進めていくうちに意外に思ったのは、図書館に基本的な史料が欠けていること、例えば県議会の議事録すら全国いずれの図書館にも所蔵されていない部分があったことである。図書館に働くものとしてやりきれなさを痛感した。そこでどうしても旧家を訪ねての史料調査が重要視されるのである。

寺田家・坪井家・鷺山家・柏木家など史料調査のため訪問したが、なかにはすでに公表された史料の再確認のため訪問したところもあった。求める史料がすでに所在不明となっており落胆したことも再三のことであった。そうした一つに岡田良一郎の「漂洋紀事本末」がある。岡田は静岡県の自由民権運動を特色づける遠州民会の議長を勤めこの貴重な記録を遺している。しかし、岡田家は移住し、史料は大日本報徳社(掛川市)、日本大学精神文化研究所(東京都)などに分散し、いずれにも「漂洋紀事本末」は所蔵されておらず、あきらめていたが、たまたま、岡田家の当主讓三郎氏が清水市在住とわかり同家を訪問したところ、ごくわずかな遺品の中からこの史料を発見することができた。私の感激は言葉で言い表わすことができないものであった。時すでに遅く『史料集』の校了後であったが。

今回の『史料集』の編集では本学農学部附属農場の伊東要助教授をはじめ多くの方々の御協力をいただいた。心より感謝の意を表します。

(附属図書館員)

■教職員著作寄贈図書

＜本館＞

黒羽清隆(教育学部)

『生活史でまなぶ日本の歴史』黒羽清隆著 地歴社 1984 (210.1/ku 72)

杉山恵一(教育学部)

『青絲編』杉山恵一著 戸田書店 1984 (911.56/Su 49)

『雲の檻』杉山恵一著 戸田書店 1983 (911.56/Su 49)

『静岡県の重要昆虫』杉山恵一編 第一法規出版 1983 (486/Su 49)

Ginkgoana, no. 2: Species and genera of laboul beniales (ascomycetes) in Japan, by Keiichi Sugiyama. Akademia Scientific Book 1973 (472.2/G 46/ 2)

吉原崇恵(教育学部)

『生活課題と教育』村田泰彦編(吉原崇恵執筆) 光生館 1984 (375.5/Mu 59)

日野資純(人文学部)

『方言学論考』日野資純著 東苑社 1984 (818/H 61)

松田禎二(人文学部)

『アウグスティヌス著作集 15 神の国 5』松田禎二〔ほか〕訳 教文館 1983 (132.17/A 96/15)

村松真一(人文学部)

『焼津における小泉八雲』小泉八雲著 村松真一訳編 静岡新聞社 1984 (934/Ko 38)

豊川卓二(人文学部)

『産業革命期の金融』豊川卓二〔ほか〕編集 東洋経済新報社 1984 (338.2/To 86)

檀原毅(理学部)

『測量の基礎』檀原毅著 山海堂 1984 (1969) (512/D 35)

『地球科学講座 第5巻 測地・地球の物理』檀原毅・友田好文共著 第2版 共立出版 1984 (450.8/C 44/ 5)

堂上龍雄・小嶋睦雄(農学部)

『スギ林産地の進路』黒田迪夫・堺正紘編著(堂上龍雄・小嶋睦雄執筆) 日本林業調査会 1984 (650.219/Ku 72)

小嶋睦雄(農学部)

『日本の林業地』岩水豊他著(小嶋睦雄執筆) 全国林業改良普及協会 1984 (650.21/I 94 開架)